

どこでも雪吊り制作

八代研究室
00612098 白川 麻理子

1. はじめに

雪吊りの代表的なものをりんご吊りという。これは明治以降西洋リンゴの栽培が日本で始まり、リンゴの実の重さから枝を守るために行っていたのが初期の技法が由来となっている。それが庭園の冬の修景として転用されてきた。

現在、職人の不足もあり雪吊りは歴史的な史跡庭園などに限られる傾向にある。また雪吊りの材料は転用することが出来ない。そこで私は一般的な庭園にも簡単に、さらに何度でも利用可能な雪吊りを考案・制作しようと考えた。

2. 材料及び寸法

雪吊り(図-1 左)は大きく分けて芯柱(中心に立てる柱)、輪取(下枝を囲う輪)、吊り縄、ポッチ(頂点に取り付ける藁製の飾り)の4つの部材で構成される。

従来の雪吊りは基本的に芯柱に表面を焼いた丸太、下枝を囲う輪取に割竹を使用し、それらを藁縄で固定したものである。

本制作は図-1(右)のような材料を使用した新たな雪吊りを提案・制作する。樹木、輪取、縄の寸法・本数および新旧部材の比較については、表-1、2 に記す。

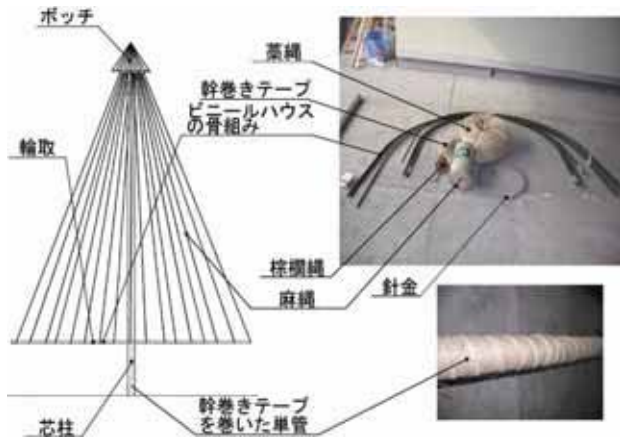


図-1 雪吊りの簡略図と部位の名称・材料の名称

3. 作業工程(図-2)

制作場所として、ものづくり大学構内、食堂脇の日本庭園にある赤松3本を剪定し、本制作のメインである新たな材料での雪吊りを2本(No.1, No.2)、従来の雪吊りを1本(No.3)制作した。図-2に示すのはNo.1である。

作業は赤松の剪定(図 2-1)、芯柱に取り付けるポッチの作成(図 2-2~5)、芯柱・縄の取り付け(図 2-6~15)という流れで行う。

松の剪定を行わなくても雪吊りは可能だが、今回は見栄えの良さを重視して、剪定を行った。

従来の雪吊りは丸太を焼く作業、竹を湾曲させる作業があるため、非常に手間がかかる。しかし、新たな材料は単管に幹巻テープを巻いたもの、輪取にはビニールハウスの骨組材を使用するため、従来の雪吊りに比べ、期間を1日短縮することが出来た。制作期間については表-1の制作期間に記す。

ポッチの制作においては藁スキ、穂先を編む、形を整える工程を1日で終了することが出来た。

表-1 新旧部材比較

部位	従来雪吊り(No.3)	新雪吊り(No.1, 2)
芯柱	丸太	単管
輪取	割竹	ビニールハウスの骨組み材
縄	藁縄	麻縄

表-2 雪吊り寸法

雪吊り No.		No.1(新)	No.2(新)	No.3(従)
樹木	高さ(m)	4.5	4.5	4.5
	芯柱高さ(m)	6.0	5.0	6.0
輪取	枝張り(m)	2.5	2.6	2.5
	円周(m)	7.3	7.9	7.5
縄	長さ(m)	5.1	4.2	5.1
	本数(本)	40	36	30
制作期間		3日間	3日間	4日間
*縄の長さは後で結びつけるために30cmほど余分に残して切る				
*縄の間隔は20cmとする				
*円の高さは地面から1.0mとする				

<p>【赤松の剪定】</p>  <p>●2-1 2009.11.10 剪定 赤松の剪定作業を行う。</p>	<p>【輪取の取り付け】</p>  <p>●2-6 2009.12.07 竹の取り付け(1) 輪取を取り付けるための唐竹を、松の幹に取り付ける。竹は縄が滑り易いので、濡らした棕綱縄で、きつく幹と唐竹を縛る。</p>	<p>【芯柱・縄の取り付け】</p>  <p>●2-11 2009.12.08 幹巻テープを巻く 単管に樹木用の幹巻テープを巻く。隙間が出来ないように、途中で折り返しながら巻いていく。</p>
<p>【ポッチの制作】</p>  <p>●2-2 2009.11.24 藁を束ねる 藁を直径約10cmになるように束ね、レーキで藁の余分な部分を取る。本来は藁スキを使用するが、今回は代用品としてレーキを使用した。</p>	 <p>●2-7 2009.12.07 竹の取り付け(2) (1)で取り付けした唐竹を枝にも取り付けていく。この作業を行うことで、枝が元に戻る力を利用して縄を吊ることができる。</p>	 <p>●2-12 2009.12.08 麻縄の取り付け 芯柱の先端部分に切った麻縄を取り付ける。縄が抜けやすいので、針金を使ってしっかりと固定する。</p>
 <p>●2-3 2009.11.24 藁を編む 藁を濡らし穂先から約30cmの部分から、藁を小指程の太さで持ち編む。編む量が多いと、傘の部分に隙間が開いてしまう。</p>	 <p>●2-8 2009.12.07 唐竹を切る 輪取を取り付けた際に枝全体が覆われるように、適当な長さで切る。切る際に竹の節を残したすぐ下を切る。輪取を取り付ける際に節があることによって、輪が落ちづらくなる。</p>	 <p>●2-13 2009.12.10 芯柱を立てる 赤松に対して、平行になるように固定する。</p>
 <p>●2-4 2009.11.24 先端部分 先端部分は、藁を小指4本分程度残し石畳で編む。編み終わったら、穂先の長さを揃え切り落とす。</p>	 <p>●2-9 2009.12.07 輪取取り付け ビニールハウス用の骨組みを、針金を使って唐竹に取り付ける。また、骨組み同士も針金で、固定する。針金の上に棕綱縄を結び針金は隠す。</p>	 <p>●2-14 2009.12.10 固定 縄を20cm間隔に均等に分け、枝に触れないように縄を張り鬼首(オノビ)で輪取に固定する。解けないよう一度縛り、余分な部分を切り落とす。</p>
 <p>●2-5 2009.11.24 完成 形を整えて完成となる。大きさは約60cmである。</p>	 <p>●2-10 2009.12.07 完成 輪取は投網を投げた時のように、湾曲させた形状にする。</p>	 <p>●2-15 2009.12.10 完成</p>

図-2 雪吊りの作業工程

4. おわりに

本制作で新たに提案した雪吊りは、従来のものと見栄えの面では大きな違いはなかったが、工期の短縮・転用が可能になった。

輪取の部分に縄を縛り付けたが、ビニールハウスの骨組み材は滑りやすく、風などで滑りやすくなってしまった。また、縄には麻縄を使用した。時間が経つと藁縄よりも縄がたるんでしまうことがわかった。

この結果に満足せず、今後も検討を重ね、自分自身が納得するまで作業を行っていきたい。

【謝辞】

本制作を行うにあたりご指導をいただいた宮島秀夫先生にこの場を借りて深く御礼申し上げます。



図-3 完成(左からNo.1, No.2, No.3)